

台湾人英霊 二万八千柱のために

台連訪日団の靖国神社参拝

本会理事 永山 英樹



取材人に囲まれる蘇主席一行

中国の恨みは納得できない

李登輝前総統を精神的リーダーとする台湾の政党、台湾團結連盟（台連）の訪日団が去る四月五日夕刻、大東亜戦争に従軍して戦歿した台湾人およそ二万八千柱を祀る靖国神社を参拝した。一行は主席の蘇進強主席以下、主席夫人、立法委員（国会議員）の何敏豪氏、元立法委員の錢林慧君氏、李先仁氏、主席秘書の李建祥氏、林瓊華氏、そしてニュージーランド李登輝之友会会長の許明芳氏ら八名。いずれもあの戦争を知らない戦後生まれである。

そこに湯澤貞前宮司と林建良台連日本支部代表が案内に立ち、本会の袖

原正敬常務理事、石戸谷慎吉、片木裕一、薛格芳各理事、松下眞啓青年部長、そして筆者など約二十名が随行。

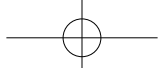
午後五時ごろ、訪日団一行は神門前に到着。歓迎に出た日本人およそ五十名による「台湾万歳」の連呼に満面笑みを湛え、拳を振り上げて呼応する蘇主席。小泉首相の参拝問題で中国が態度を硬化させるさなかでの台湾政党政党首の初参拝とあり、ここで早速日台の報道陣に取り囲まれた（中国の記者はここでは近づく）。そこで蘇主席は、「二人の台湾人、一政党の党首として、当時の祖国（日本）に殉じた二万八千人の英霊に最大の敬意をもって参拝に来た。もちろん日本人英霊に対しても

だ」と述べた上で、「靖国神社は恩讐を越え、平和を求める場所。どこの国であれ祖国に殉じた方には敬意を払うべきだと強調したい」と語った。そして中国の態度に関する質問には「中国の観点はアジアを代表していない。日本を恨み続ける態度に、台湾人は納得できない」と答え、「台湾人は台湾人であり、中国人とは違う」と強調した。

真心からの厳粛な参拝

その後、一行は蘇主席を先頭に参道を肅々と進み、到着殿の貴賓室「榊葉の間」へ。そこで南部利昭宮司と挨拶を交わした後、蘇主席が一行を代表して参拝の記帳を行った。その際の蘇主席の厳粛な面持ち、あるいはそれを見守る一行の緊張した姿に、彼らの英霊への真心を感じずにはいられなかった。

余談ながら、この部屋に「人民日報が明日の一面で今日の参拝を報じるらしい」との情報が入ると、一行は不敵の笑み。中国など意にも介さぬといっ



台湾からの援軍
ceremony

週刊新潮(4月14日号)に掲載された参拝の様様

たこの態度は、ぜひとも日本の議員に見せたいところだった。
六時半ごろ、貴賓室を出た一行は、まず湯澤前宮司の手ほどきを受けて手水を取り、そして拝殿へ。そこで御神楽の儀に参列し、靖国の舞などを一時間ほど拝観、厳粛な空気の中の雅やかな伝統神楽に、一行からは感嘆の声が聞かれた。そしてその後、いよいよ本殿へと進み、英霊の御前で拝礼した。こうして参拝は終了した。
到着殿を出て、待ち受けていた報道

陣に再び囲まれた蘇主席は、「神社側の厚いもてなしに感謝したい。参道で全く知らない日本国民からお礼をいわれ、とても恐縮している」と感想を述べた。そして、またしてもの中国関連の質問に「台湾は日米と同じ民主主義だ。民主国家は過去にこだわらなくても平和は得られる」と力説した。
それが終わると随行者に対し、とても晴れ晴れとした表情で「参拝は今回の日本訪問でとても重要でした。ありがとうございました」と、一行を代表して礼を述べ、境内を後にしたのだった。それを見送った随行者側には、清々しさだけが残った。

英霊のご加護を思う

翌日帰国した一行を台湾で待ち受けていたのは、反日の中国統一派グループによる空港での罵声や卵投擲の嫌がらせであり、やはり統一派のメディアによる中傷攻撃だった。つまり「過去にこだわる」ところの在台中国人の政

治的狂奔である。その一方で、杜正勝教育部長(文科相)が「大戦の犠牲になった台湾同胞を追悼するのは当然のこと。追悼を通じて歴史の教訓を得ることが大切だ」と発言したことから、台湾の国会、メディアではその後しばらく、こうした理性派と反理性派との間で「靖国論争」が展開された。

だがその結果、従来あまり語られることのなかった台湾人日本兵の歴史、そしてその御魂が、日本で大切に祀られているという「知られざる事実」に脚光があたったことは幸いだった。

それは、日本にも全く同じことがいえた。また蘇主席がいう如く、「台湾人は中国人とは違う」との認識が日本人の間で広く持たれ、台湾への心理的距離が大いに狭められたはずである。これは運命共同体としての両国への、靖国の英霊のご加護と考えるべきか。
今回、台湾人英霊もさぞお喜びであったことだろう。台連一行の心に、日本人が学ぶべきことはあまりに多い。